

「主イエスの捕縛と弟子たちの離散」

2014年11月26日

マルコによる福音書 14 章 43 節～50 節。 さて、イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダが進み寄って来た。祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。捕まえて、逃がさないように連れて行け」と、前もって合図を決めていた。ユダはやって来るとすぐに、イエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。人々は、イエスに手をかけて捕らえた。居合わせた人々のうちのある者が、剣を抜いて大祭司の手下に打ってかかり、片方の耳を切り落とした。そこで、イエスは彼らに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。しかし、これは聖書の言葉が実現するためである。」弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。

夜のゲツセマネにエルサレム神殿の衛士と群衆が剣や棒を持ってどやどやと押しかけてきた。その先頭にはユダがいた。「過越祭」の時であるから、月は満月に近い。しかし、オリーブの木が生い茂り、暗い。主イエスをよく知ったユダが接吻をもって、主イエスを知らせる合図にしていた。ユダは主イエスに近づき「先生」と言って接吻した。ユダが「接吻した」というギリシャ語には「カタ」という言葉がつけられ、深く、強い接吻であったと記している。愛と尊敬を表す接吻を裏切りの合図としたユダの心は屈折している。私なら、オリーブの木に隠れ、主イエスを指差しただろうと思う。

接吻を合図に、確認できた衛士は手をかけて捕えた。弟子の一人が剣を抜いて、衛士に切りかかり、片方の耳を切り落とした。マタイ福音書は、この時「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」と言ったと伝えている。人間は武器で立ち、武器で滅びる歴史を営々と繰り返してきた。紀元前 8 世紀、預言者イザヤは「彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない」と語った。主イエスは力を頼りに生きることとは真逆な、自らが十字架で死んで、人間を救う道を示された。

主イエスは、神殿から捕縛につかわされた者たちに向かって「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。しかし、これは聖書の言葉が実現するためである」と言われた。主イエスは毎日、神殿に行き、神殿当局者と激しい論争をした。彼らは論破され、民衆の主イエスへの支持と賛意の前で、手出しできなかった。ユダの裏切りを得て、夜中の捕縛となった。悪は暗闇で行われる。

この時「弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。」もちろん、自分も捕らえられることを恐れたからである。つい数時間前「たとえ、御一緒に死なねばならなくても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」と豪語した。それが、主イエスが捕縛されたと分かった時、蜘蛛の子を散らすように逃げ去った。

私も牧師という仕事上、殺されるとは思わないが、身の危険を感じたことが幾度かある。その場に行きたくなかったし、その場から逃げ出したかった。弟子たちが遁走したことを痛いように理解できた。人は誰でも、我が身がかわいい。勝ち誇る衛士に捕えられ、主イエスは全くの孤独の中、大祭司の庭に連行されて行った。